

第45回



「ごはん・お米とわたし」

作文・図画岩手県 コンクール作品集



 JA岩手県中央会



さあ、みんなで取り組んでいこう。
やっぱり国産農畜産物推進運動
～みんなのよい食プロジェクト～

発行/令和3年2月19日 企画・編集・発行/JA岩手県中央会 印刷・製本/川嶋印刷株式会社

目次

◆ごあいさつ	1
JA岩手県中央会 代表理事会長 小野寺 敬作	
◆図画部門入賞作品	2
◆作文部門入賞作品	9
◆総評	16
審査委員長／元岩手県教育委員会教育委員長 八重樫 勝	
◆図画部門を審査して	16
盛岡市立下橋中学校 指導教諭 佐々木 俊江	
◆作文部門を審査して	17
盛岡市教育委員会学校教育課 指導主事 山下 るり子	
◆コンクール入賞一覧	18
◆コンクール概要	22

図画・作文各部門
1部：小学校1～3年
2部：小学校4～6年
3部：中学校1～3年



JAグループ

JA岩手県中央会

代表理事会長

小野寺

敬作

第45回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールに、作品をご応募いただきました皆さまにお礼申しあげますとともに、入選された方々には心からのお祝いを申しあげます。

このコンクールは、子どもたちに、お米やごはん食がどのように作られ食卓に並んでいるのか、そして、稲作が地域においてどんな役割を果たしているかなどを知っていただくことを目的として、昭和51年から実施しております。

45回目を迎えた今回は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により全国コンクールが中止となったにもかかわらず、県内各地から作文71点、図画166点もの力作が寄せられました。

皆さまから寄せられた作品を拝見しますと、家族で食事を作る様子、ごはんを美味しく食べる姿、美しい田んぼの風景に心惹かれた気持ち、温かな家族の愛情や稲作を大事に継承する郷土への愛着など、日頃の体験や出来事を生き生きかつ的確にとらえています。次代を担う子どもたちの意識の高さに改めて目を見張るとともに、「ごはん食」を中心とした日本型食生活の将来への継承について、大きな期待を抱くことができました。

JAグループでは、日本の「食」とは何かを考え、その「食」を生み出している日本の農業を好きになっていただくという取り組みを全国的に進めております。「食」の未来をつくることは、日本の未来をつくることにつながります。その中心の一つとなるのが、古くから日本の食文化を築いてきたお米です。

このコンクールをきっかけに、家族で食卓を囲むことの幸せを感じたり、お米を作る農家の思いや自分たちが暮らす地域農業について考えたりしたことは、とても貴重な経験となったのではないのでしょうか。最後に、今回ご応募いただいた学校の先生方をはじめ、関係する皆さま方のご支援とご協力に感謝を申しあげ、ごあいさつとさせていただきます。



図画部門
2部

いわてけんきょういくちょうしょう
岩手県教育長賞

「おいしいお米で手まきずしパーティー」

たか はし いち か
高 橋 一 花

きたかみ しりつみなみしょうがっこう おん
北上市立南小学校 4年



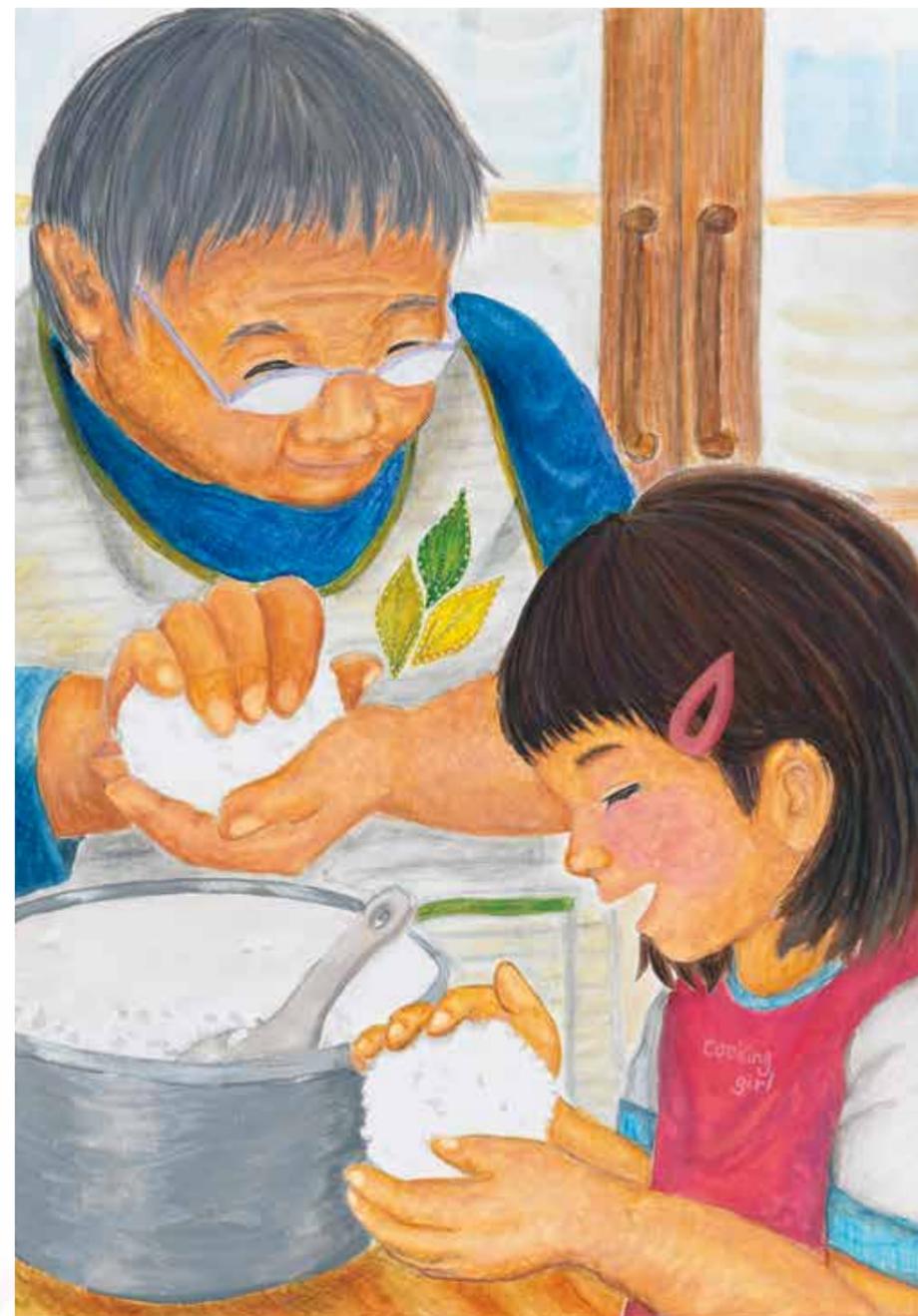
図画部門
3部

いわてけんちじしょう
岩手県知事賞

「おにぎりの思い出」

ふじ た わか ば
藤 田 若 葉

きたかみ しりつえぶりこちゅうがっこう おん
北上市立江釣子中学校 3年



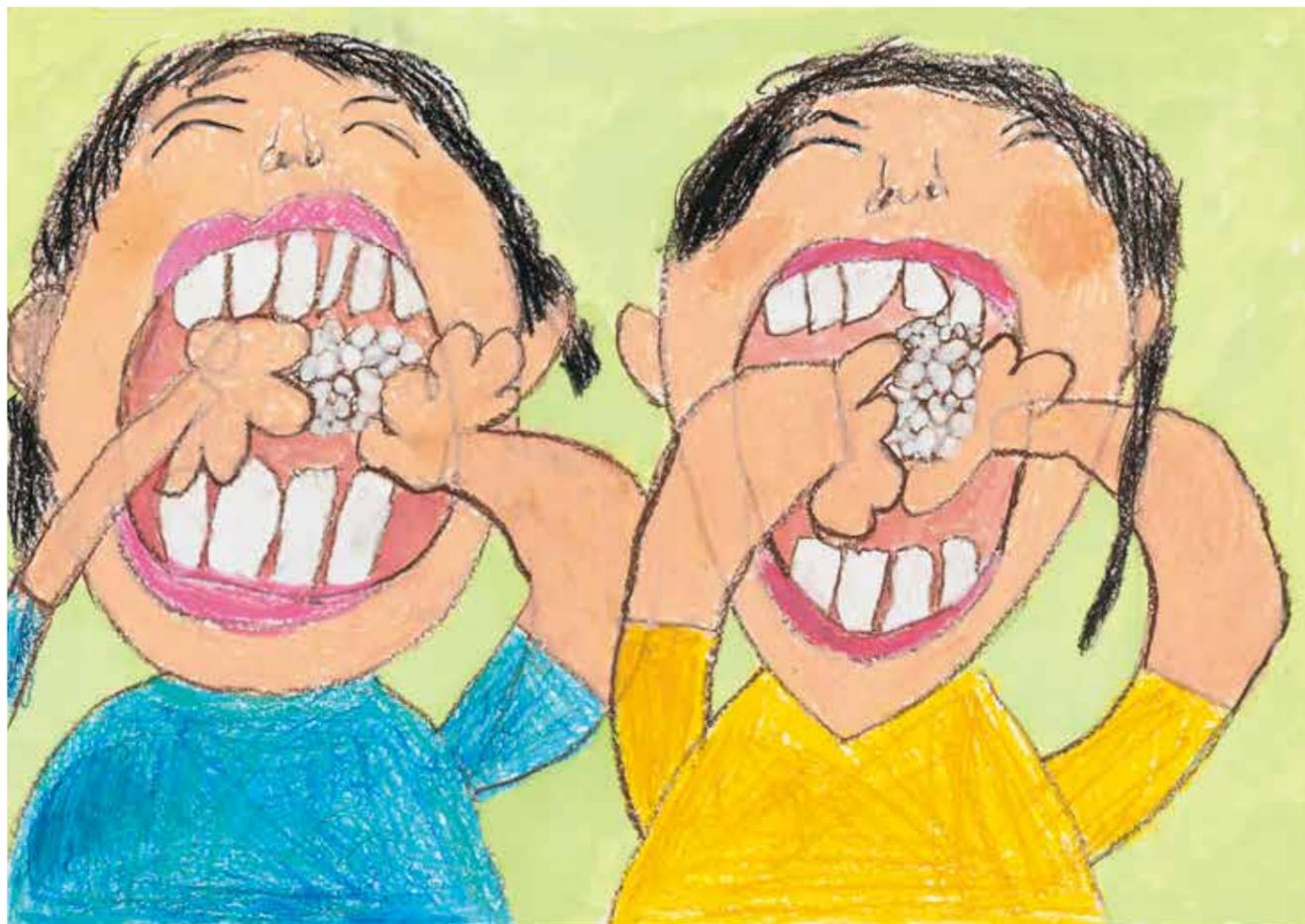
図画部門
1部

いっばんしゃだんほうじんいえ ひかりきょうかい
一般社団法人家の光協会
ほっかいどうとうほくふ きゅうぶん か きよくちょうしょう
北海道東北普及文化局長賞

「おにぎりおいしいな」

かわむらねね
河村寧音

くのへそんりつえさしかしょうがっこう おん
九戸村立江刺家小学校 1年



図画部門
2部

じえいいいわてけんごれんかいちょうしょう
J A岩手県五連会長賞

「ジジとババの田んぼ」

ちばこはる
千葉心遙

いちのせきしりつなきざわしょうがっこう おん
一関市立滝沢小学校 4年



図画部門
2部

ゆうしゅうしょう
優秀賞

「夕暮れの田んぼを散歩するぼくと弟」

いま いずみ そう じゅん
今 泉 蒼 順

みやこ しりつみやこしょうがっこう 6年
宮古市立宮古小学校 6年



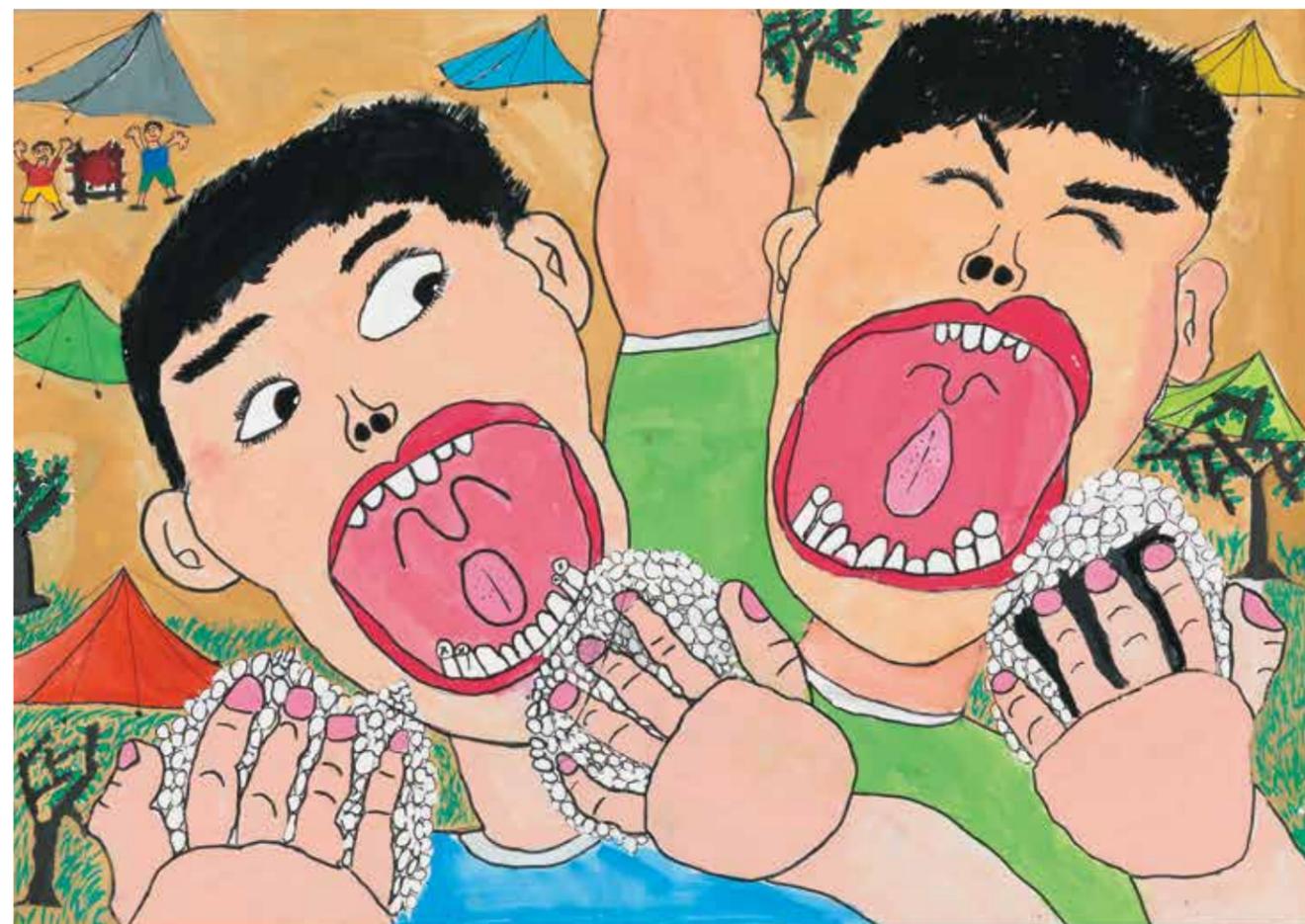
図画部門
1部

かぶしがいしゃ にほんのうぎょうしんぶんとうほくしゅうしょう
株式会社日本農業新聞東北支所長賞

「やったぜ、おにぎりだ！」

さくら ば まさ はる
櫻 庭 正 悠

くのへさんりつえきしあしょうがっこう 2年
九戸村立江刺家小学校 2年



「絆の餅つき」
佐々木 亮 輔

みやこしりつづがるいしちゆうがっこう
宮古市立津軽石中学校 2年



私の家では、先祖代々米作り農家でした。四年前の台風十号の豪雨では、祖父が精魂込めて育てた田んぼを襲いました。田んぼの被害はひどく元に戻すにはかなりの努力が必要でした。

「もう田んぼはやめる。」

高齢な祖父は残念そうにポツリとつぶやき、仕事を持っている父や母も続ける事が出来なくて、お米を作ることをやめてしまいました。私は、幼い頃から祖父と祖母と共に米作りの手伝いをするのが大好きでした。

米農家であった事もあり、お正月や作物が採れた感謝の日等の節目節目の日には神様や仏様に我が家で収穫したもち米でついてお餅をお供えするのが私の家の古くからのなわしです。

私が生まれこの家に来るまでは、毎年祖父が杵をにぎり祖母が臼の中のお餅を返してお供え餅をつけていました。その後、父が祖父の後を引き継いで、毎年十二月三十日に祖母と二人でお正月支度の餅つきをするようになりました。

昨年末、お餅つき準備の時、父が不意に私に、

「亮輔、今年から餅ついてみるか。」

「僕に、出来るかな。」

「大丈夫、俺が臼のお餅を返すから心配しないでやってみる。」

今まで父がしていた餅つき。何だか父から、一人前に認めてもらった気持ちで嬉しい様な照れくさい様な気持ちでした。初めて握る杵はずっしりと重く、臼のふちを叩かないように気を付けながら精一杯頑張る、時々臼の中のお餅がくっつかない様に父がひっくり返してくれました。

「こっちは、ついたか。」

「あともうちよつとかな。」

臼の中のお餅をまんべんなくつかないと、もち米のつぶつ

ぶとした食感が残ったお餅になるし、水を入れすぎると柔らかすぎのお餅になってしまいます。

「よし、いいぞ。」

大きなボウルに熱々のお餅をへらで取って、入れるとすぐさま祖母や母、妹達がのし板の米粉の上で丸めて形を整えてお供え餅にしています。妹と祖母が、

「お供え餅の大きさはこのくらいでいいの。」

「少々いびつでも神様は喜んでくれるよ。」

「少々いびつでも神様は喜んでくれるよ。」

大小様々なお供え餅を十三個作り、神様にお供えし、もう一白分は切り餅にしました。

「亮輔、いっぱい食べろ、うめいぞ。」

翌年の元旦、祖父が私に言ってくれました。それは祖父から私へのねぎらいと最高の褒め言葉に聞こえ、嬉しかったです。今年最初に家族揃って食べる、濃厚で伸びのあるお餅は格別に美味しかったです。

残念ながら私の家では、お米作りを続ける事が出来なくてやめてしまったけれど、お米一粒一粒を作る事に並々ならぬ苦労が詰まっていることの大変さに感謝する気持ちと祖父からバトンを引き継いだ毎年の我が家のならわしの餅つきをこれからも絶やさず私は、守り続けていきたい。

今は、新型コロナウイルスの影響もあり、遠く離れた家族とも手軽にオンラインでコミュニケーションを取れる手段が普及しています。核家族化、生活様式の変化で古くからのしきたりや風習は無くなりつつある社会ですが、私は家族と同じ時間を過ごし、笑ったり思いを通わせたりしながら、支えあって生きていく姿に意義があると思います。

私は祖父がお米作りに全身全霊注いでいた姿勢や気持ち、餅つきを通じての家族の絆は、この先大人になっても決して忘れないと思うし、何にも代えられない私の心の大切な宝物です。

「思い出とともに～私達はごはんを食べて成長してきた～」

及川 小 春

いちのせきしりつおきたちゆうがっこう
一関市立興田中学校 3年



「なんかいもたべたいたけのごはん」

きくちりんか
菊池梨花

おうしゅうしりつぎざいくしょうがっこう
奥州市立木細工小学校 1年



「きょうのよるごはん、なかに。」
 「ばあちゃんにきくと、
 「きょうは、たけのごはんだよ。」
 と、やさしいこえ。
 「やったあ。おねえちゃん、きょう、たけのごはんだったよ。」
 わたしは、おねえちゃんに、おおごえでおしえました。たけのごはんは、ばあちゃんのとくいりようりです。まえにたべたときもおいしかったので、きょうもぜったいおいしいとおもってわくわくしました。
 「とんとん、とんとん。」
 だいどころから、ばあちゃんがたけのこをきるおと。すこしまっている、おいしそうなおいがしてきました。さつきからおながすいていたので、はやくたべたいな、はやくできないかなと、うきうきしました。
 「できたよ。」
 「ばあちゃんのおおきなこえ。
 「やったあ。」
 わたしは、だいどころへはしっていききました。できあがったたけのごはんを、おちゃわんにもってもらいました。しろいゆげがほかほかでて、ごはんは、たけのこよりもすこしちやいろになっていました。こゆびぐらいのたけのこが、ろっぽんはいつていました。かんでみると、ごはんは



た声で、
 「じいちゃんは、一関市で一番米を作っている。もし、この米ができなかったら、じいちゃんの米を買ってくれている人が困るだろう。自分のためだけじゃなく、じいちゃんの米を待っていてくれる人のためにも、がんばらないでめなんだよ。」
 と、教えてくれた。じいちゃんが米のためにどんなにがんばっているか、米を届けられる時のうれしい気持ちが伝わってきた。
 私は、弟と一緒に、
 「何か手伝えることはない。」
 と聞いた。
 「じいちゃんは、
 「もう手伝ってもらえるような年になったんだな。」
 と、とても喜んでくれた。
 田んぼに入ったごみを取りながら、私は、
 「じいちゃん、これからも米作りをがんばってね。ずっと、応援しているからね。」
 と言った。手伝うことができて気持ちがすっきりした。じいちゃんはえらいなと思った。
 じいちゃんにとって、お米は家族と同じだと思う。米作りのことは何でも知っているし、夜も田んぼのそばにいて、寝ないで水の管理などをしていくから。
 夜、出てきたご飯は、光って見えた。白い米粒に、じいちゃん笑顔が重なった。
 「おいしい。」
 おねえちゃんを見ると、おねえちゃんも、
 「おいしいね。」
 と、にこにこうれしそう。ばあちゃんも、
 「うん、おいしい。」
 じぶんでいったので、みなでおおわらい。
 わたしは、ばあちゃんがつくったたけのごはんがだいすきです。おいしいたけのごはんを、またつくってほしいです。

「じいちゃんのお米」

きくちりんか
菊池咲希

いちのせきしりついちのせきしょうがっこう
一関市立一関小学校 5年



七月二十八日、ずっと大雨が降っていた。
 私が心配だったことは、二つ。一つは、私の家のこと。去年の台風の時避難したことがあったので、水が上がらないことを祈っていた。もう一つは、田んぼのこと。じいちゃんのお米は、とっても広く、北上川にも近く、水路もたくさんあるからだ。
 二十九日の朝四時ぐらいに、じいちゃんから電話がかかってきた。
 「大変だ。田んぼに水路と北上川からあふれた水がきて、田んぼが川になっている。」
 と、あきらめたような声で話していた。私は、時間がたてば元に戻るだろうと思っていた。
 しかし、七時頃にばあちゃんと田んぼを見に行くと、私の考えとは違う光景があった。いつもなら、遊水地に青々と広がる田んぼは、道路や水路が十の字になって見える。でも、昨夜の大雨で道路や田んぼは水であふれかえり、身動きできない状態になっていた。
 そんな状況の中でもじいちゃんは、トラクターを堤防に上げるなど、できることをてきぱきやっていた。じいちゃんの前には、田んぼに入ってしまった車が見えた。私は、とてもびびくりした。じいちゃんに聞くと、夜、暗い中で田んぼを守っていた人の車だそう。乗っていた人の行方が分からないと聞いて、私は不安になった。
 「じいちゃんは、そのことを知っているのに、何で逃げないの。」
 と、とつさに聞いていた。すると、じいちゃんは落ち着いて、
 「七月二十八日、ずっと大雨が降っていた。私が心配だったことは、二つ。一つは、私の家のこと。去年の台風の時避難したことがあったので、水が上がらないことを祈っていた。もう一つは、田んぼのこと。じいちゃんのお米は、とっても広く、北上川にも近く、水路もたくさんあるからだ。二十九日の朝四時ぐらいに、じいちゃんから電話がかかってきた。『大変だ。田んぼに水路と北上川からあふれた水がきて、田んぼが川になっている。』と、あきらめたような声で話していた。私は、時間がたてば元に戻るだろうと思っていた。しかし、七時頃にばあちゃんと田んぼを見に行くと、私の考えとは違う光景があった。いつもなら、遊水地に青々と広がる田んぼは、道路や水路が十の字になって見える。でも、昨夜の大雨で道路や田んぼは水であふれかえり、身動きできない状態になっていた。そんな状況の中でもじいちゃんは、トラクターを堤防に上げるなど、できることをてきぱきやっていた。じいちゃんの前には、田んぼに入ってしまった車が見えた。私は、とてもびびくりした。じいちゃんに聞くと、夜、暗い中で田んぼを守っていた人の車だそう。乗っていた人の行方が分からないと聞いて、私は不安になった。『じいちゃんは、そのことを知っているのに、何で逃げないの。』と、とつさに聞いていた。すると、じいちゃんは落ち着いて、た声で、
 「じいちゃんは、一関市で一番米を作っている。もし、この米ができなかったら、じいちゃんの米を買ってくれている人が困るだろう。自分のためだけじゃなく、じいちゃんの米を待っていてくれる人のためにも、がんばらないでめなんだよ。」
 と、教えてくれた。じいちゃんが米のためにどんなにがんばっているか、米を届けられる時のうれしい気持ちが伝わってきた。
 私は、弟と一緒に、
 「何か手伝えることはない。」
 と聞いた。
 「じいちゃんは、
 「もう手伝ってもらえるような年になったんだな。」
 と、とても喜んでくれた。
 田んぼに入ったごみを取りながら、私は、
 「じいちゃん、これからも米作りをがんばってね。ずっと、応援しているからね。」
 と言った。手伝うことができて気持ちがすっきりした。じいちゃんはえらいなと思った。
 じいちゃんにとって、お米は家族と同じだと思う。米作りのことは何でも知っているし、夜も田んぼのそばにいて、寝ないで水の管理などをしていくから。
 夜、出てきたご飯は、光って見えた。白い米粒に、じいちゃん笑顔が重なった。
 「おいしい。」
 おねえちゃんを見ると、おねえちゃんも、
 「おいしいね。」
 と、にこにこうれしそう。ばあちゃんも、
 「うん、おいしい。」
 じぶんでいったので、みなでおおわらい。
 わたしは、ばあちゃんがつくったたけのごはんがだいすきです。おいしいたけのごはんを、またつくってほしいです。」

「バトン」

にっ た まさ ちか
新 田 真 丸

きたかみ しりつくろさわじりにししやうがっこう おん
北上市立黒沢尻西小学校 5年



五年生になった春、今まで考えてもみななかったことを考えることになった。

田植えの始まる頃、祖父の運転で田んぼまで車を走らせた。その途中に、多くの大好きな長い一本道がある。なぜかという、田植えの季節になると、風景がまるで一枚の絵のように美しく変身するからだ。

長い道路の両側には、ナナカマドの街路樹。その街路樹に沿って、何枚もの大きな田んぼがずらりと続く。

西の山にはまだ残雪があり、水を張った田んぼの水面には、空の青さや周りの景色が映し出され、そうかいな気分になる。

だが、久しぶりに通ったその道の風景は一変していた。そこには、黒い大きな倉庫と事務所らしき建物が建っていた。ちよつぴり都会の国道でも走っているかのようで、辺りの風景とは似合っていないように感じた。

その時祖父が、

「このへん一帯は、苗作りからやって比較的大きな農家が多く、農地もそつちこつちに持っている人たちがんだが、それでも農地を手放す人が、年々増えてきているようなんだ。」

と、ぼそつと言った。

そういえば、去年の暮れ、市役所から送られてきたアンケートの質問用紙に目を通して祖父が、

「こんなアンケート、今まで来たことないな。」

と、言いながら回答していたのを思い出した。その質問の中には、「農業を継続する」「委たくする」など、いろいろな項目があったと思う。その時は、祖父が田んぼを続けて当然と思っていたので、祖父の言葉を気にもしなかったが、ふと何て回答したのか気になり聞いてみた。

「おじいちゃんさ、去年市役所から届いたアンケートに、農業を続けるかどうかという質問があったでしょ。あれ、何て答えたの？」

そう聞くと、少しの間を置いて祖父は、

「ん？まあやれるところまでやって、あと五、六年は大丈夫だと思うから、『継続』にしておいた。」

と言って、笑った。

あと五、六年。五、六年といったら、祖父は七十五歳で、ほくは高校生か。

その時、わが家の田んぼはどうなっているのだろうか。今のままでわが家の田んぼも雑草だらけになるか、手放すしかなくなるのだろうか。急に心配になった。でも、そういうことなんだ。引き継ぎがうまくいかないとバトンがつかない。と、その時は真剣に考えたが、その後はわすれてしまっていた。

五月四日の朝、父が何を思ったのか、

「今日は、田植えの手伝いにいくぞ。」

と、急に言い出した。ほくは、身を乗り出して出かける準備を始めた。

「お米が教えてくれた平和」

ふじ た わか ば
藤 田 若 葉

きたかみ しりつえぶりこちやうがっこう おん
北上市立江釣子中学校 3年



私の祖母は八十八歳だ。病気をして体が弱くなつてしまつて外に出たがらなくなつた。けれども、体調が良い時をみて、ドライブに誘うと喜んで一緒に出かけられる。ドライブといつても近所の風景を見て回るだけだが祖母は季節の何気ない変化も楽しそうにしている。特に田んぼの様子を見るのが好きで、

「もう代かきしてるのか！早いなあ。」

「苗がおがってきれいだなあ。」

と、田んぼの風景の移り変わりをうれしそうに眺めている。そんな祖母が、今年七月の長雨の影響で米の作柄が良くないかもしれないというニュースを見て、

「困つたなあ。米がとれなかつたら、大変なあ。」

と、まるで自分の田んぼのように心配していて、私は祖母がどうしてそこまで田んぼのことが気になるのだろうかと思ふ不思議に感じていた。そして、祖母から戦争の頃の話聞いて、気持ちになんとなく分かつた気がした。

「ばあちゃんが小学生の頃、日本は戦争中で生活がとても大変だつたんだよ。日常の生活の品物もなくて困つたけど何より食べるものがなくて本当につらかつた。」

「浜で作つた塩を持って遠く買い出しに行つたもんだ。その塩とお米を交換してもらつたりしたけれど、周りにはせつかく手に入れた食べ物を馱で憲兵さんに没収されて泣いている人もいたんだよ。」

祖母は東北の久慈市の出身だが、遠く秋田県の横手まで祖母のおじいちゃんと汽車を乗り継いで買い出しに行つたそう。大人と一緒にといえ、小学生の子どもがそんな遠くまで食べ物の買い出しの手伝いをしていたなんて私は胸が痛くなつた。お米を手に入れるのはとても難しく、大晦日など限られた時しか家族で白いご飯を食べることは無かつたそう。祖母は食べ物に困つた頃の事が心のどこか

に今でも残っているから田んぼの実りがとても気になるのだろう。

私は今、白いご飯を当たり前のように食べている。品種改良されたとてもおいしいお米が普通に手に入る時代に生きていく。戦争で食料不足だった時代から、今のよう食べ物に困らない時代になれたのは、戦争を乗り越えて農地を耕し、災害にみまわれながらも努力と知恵で一生懸命に戦後の農業を支えてくれた先人たちがいたおかげだと思う。こうした中、日本から世界に目を向けてみると、今も戦争や紛争、飢きんなどで食べ物に困り、苦しんでいる人たちはまだまだ沢山いる。私たちの今の生活が当たり前ではない、ということを知っておかなければならないと思う。

昨年十二月、パキスタンとアフガニスタンで医療、水源の確保、農業支援の活動に尽力されてきた医師の中村哲さんが銃撃を受けて亡くなられた。中村さんはアフガニスタンの現状を見て「人々が三度の食事をとれて、家族と共に生活できるようにしたい。そのためには百の診療所より一本の用水路が必要だ。」といい、重機を操り、用水路を作りつづけた。私は中村さんのことを知り、食べることを安定させることで平和を生み、平和が食べられることを安定させているのだと思つた。食料自給率の低い日本において、お米は数少ない自給自足できている大切な食べ物だ。戦後の農業を支えて、そして平和を守り続けてくれた沢山の人の努力に私は改めて感謝をしたい。

八月になって晴れの日が続いたおかげで、私の住む地区の田んぼでは今、風にゆれて気持ち良さそうに稲の花が咲いている。これからも、この田んぼの風景が続いてくれる事を強く願う。なぜなら、この田んぼの風景こそが日本の平和の象徴だと思うからだ。

「伝承と受け継がれゆく味」

なか しま あゆみ
中 寫 歩

いちのへちよりつおこなかやまちゅうがっこう おん
一戸町立奥中山中学校 3年



蓮華ふちどる大きな水鏡、水面に映る新緑鮮やかな木々が満月に届く、たった一夜の神秘的な風景。雪深い奥中山に田植えの時期を告げています。五月の満月の美しさは、自然からの贈り物です。

宮沢賢治のふるさととして知られる岩手県。今では食味ランキング特A常連ですが、「やませ」吹くこの土地での米作りは厳しいものだったと平成生まれの私でも知っています。

県内で最も美味しいお米といわれる「銀河のしずく」はキラキラ光る星空からお米一粒一粒の輝きをイメージし、つや、白さ、粘りを表現していると教えてもらいました。残念ながら栽培適地を限定している為生産量がまだ少なく私の住む奥中山では作る事が出来ない品種です。栽培技術の改良を重ねていけば、いつかここでも生産出来るでしょうか。

農業、農村、農地の価値を守り、先人から受け継いできた技術を次世代へと紡いでいけるでしょうか。度重なる災害、高齢、後継者不足、東北の米作りや農業が抱える問題はあまりに深刻です。規格外が収入につながるよう支援や工夫をしてもらえたなら農業は発展していくのではないのでしょうか。作り手が掛けた愛情は特Aになれなくても規格外であっても同じなのです。普段、手に取る物がどれだけ選りすぐれた物であるか、消費者は気付いて欲しい。そんな思いでいっぱいです。

どんなに食欲が無い日でも、心が折れていても一口で笑みがこぼれてしまう、魔法が掛かった祖母直伝の「鶏ご飯」、餅米だけで作るの「おこわ」と称した方が良いかもしれませぬ。一晩水にひたした餅米を、じっくり蒸す間に鶏肉、ごぼう、人参、しいたけを炒め、味をととのえます。それぞれの食材の香りが広がり香りだけで、心が晴れていきま

「コロナがお米農家に与える影響について」

あし かや ひな た
芦 萱 陽 菜

いちのせき しりつまいかわしょうがっこう おん
一関市立舞川小学校 4年



わたしの家族はみんなごはんが大好きです。さらに、父とそ父は酒米というお米からできている日本酒も大好きです。今年は、コロナかく大ほう止のため飲食店をしめたり、外食に行かなくなった人がふえたこととお米や日本酒の消費がへってしまいました。酒ぞう屋さんせいぞうをひかえたため酒米のざい庫がふえ、そのため酒米農家さんは米のげん産をしなければならず、生活にこまっています。

来年以こうもげん産や取引でい止をもとめられているそうで、去年までの米作りができない農家さんもふえています。今まで美味しいお米を作るために苦ろうしてがんばってきたのにどうしたら良いのでしょうか。

テレビで見ましたが、酒米はふつうに食べると物足りない味だそうです。でも、チャーハンにすると美味しく向いているそうです。そこで少しでも消ひしてもらおうと、中か料理店に売ったり、家庭用に小ぶくろでの通信はん売を始めている農家さんいました。わたしは、酒米で作ったチャーハンも食べてみたいと思いました。

コロナ以外にも困ったことがあります。お米の消ひがへっているのです。菓ごもり生活の人が多いためか、消ひ量は一時期ふえたようにみえました。でも、それは買い占めた人がいただけで、実さいは年間で十万トンへっているようです。一人当たりになると年間五十三キログラムの消ひがへっているのだそうです。今はお米にかわる小麦を使った主食のパン・スパゲティ・ラーメンなどの消ひがふ

えています。でもわたしは、やっぱり日本食が大好きなので、できるだけお米を三食食べるようにしたいと思っています。

お米の消ひ量が多い国ではコロナ感せん者が少ないという研究結果も聞きました。お米を食べている人はちよう内細きんが良く、めんえき機のが高くなり、感せんをよくせいしているみたいです。げん米や米ぬかの利用も良いえいきようがあるようです。このじようほうを聞いてわたしはますます、お米を毎日食べたくなりました。

去年までふ通に出来ていたことが出来なくなったりして困ることもあります。お米だけじゃかわらずに人間のそばにいてほしいと思います。そのためには、お米を作っている農家さんをへらさないことです。コロナだけでなく、災がいつも深くです。近くの田んぼがこう水でうまったり、台風でいなほがたおされたりして、農家さんも大変だと思えます。でも、一人でも多くの人がたくさんのごはんを食べ続けることで、農家さんを応援していく必要があると思います。わたしも、大好きな「ひとめぼれ」をこれからも家族で毎日たくさん食べていきたいです。

母が子供の頃は、お盆やお正月前の家族が揃う日に作られた祝い膳の様なご飯だったと聞かされました。母が作るようになってからは、試験、入寮、入社など応援の為の一膳となり、食卓に並ぶ回数も増え、離れて暮らす兄、伯母夫妻から帰省の度に「鶏ご飯作って待っていて。」とリクエストが入ります。祖母の実家の味だと教えられたので明治生まれの曾祖母から代々受け継がれてきた真心の一膳です。成績の悪い私も、度々この「鶏ご飯」に救われてきました。

帰省も出来ず、会いたい家族に会えない年でした。休校が長かった春休み中、お盆に備え、私が母に教わり何度も作ってみました。合数が変わったり食材の量が違ったりすると味が定まりません。

お盆最終日、赤飯、きのこご飯、鶏ご飯、たくさんの餅米を蒸し、冷凍小分けをしました。ふるさとの味いっぱいの荷物は、家族の疲れた心を笑顔にしてくれるでしょうか。元気の源になるよう願って箱詰めしました。祖母の味になるまで、あとの位餅米にお世話になるでしょう。離農しても時を定めず、いつでも餅米料理が作れるようになったのは、農家の方々の努力と伝えられてきた技術のおかげだと思えます。

ながかった梅雨が明け、行儀良く並んだ稲穂は少しづつ色付き始め、秋の気配へと変わり頭を垂れています。

特Aにならずとも米作りや稲穂の頑張りには特Aに匹敵し受け継いだものは偉大だと思えました。

自然からの恵みと農業に携わる人たちに感謝の心を持ち続け、祖母の味を目指し、鶏ご飯作りに励みます。

湯気の向こう、四季映す日本の農業が離れて暮らす人達を元気にしてくれるようお願いを込めて。

総評



元岩手県教育委員会
審査委員長
八重樫 勝

第四十五回「ごはん・お米とわたし」作文・図画全国コンクールは、新型コロナウイルスの影響で中止になりました。

しかし、主催者（中央会）のご英断により岩手県コンクールは実施することになりました。審査に関わっている者として、とてもうれしいことでした。一方、例年通りの作品の応募があるだろうかという心配もありました。しかし、それは杞憂に終わりました。例年並の応募があったのです。児童生徒の皆さんや家族・指導に当たられた先生方の熱意、ご苦労のおかげです。このコンクールに寄せる期待の表れであり、コロナに負けない取り組みが感じられました。

作品全体を通して、家族そろって農作業をしていること、食べ物を大切にしていること、世界の食糧事情や食品ロスなどにも題材を求めており、しっかりと物の見方、考え方をしていると感じました。大きな学習をしている結果だと思われれます。

〈作文の部〉
・ごはん（食事）やお米にまつわる「出来事」を「家族とのふれあい」を通して、素直な表現で書いた作品が多かった。
・様子を表す語、時間や事柄の順序を表す語を適切に用いて、読み手によく伝わるように工夫している。

・ごはんやお米に対する「思いや考え」を文章の組み立てを工夫しながらまとめている。社会や世界に視野を広げ、調べたことを根拠に自分の考えを主張している。
・地域への誇りと愛着を深めていることが伝わってくる作品が多かった。
・食にまつわるエピソードを通して「食や家族に対する感謝の念」「稲作文化や日本食への尊敬の念」等が効果的に書かれている。
・家族の在り方や自己の生き方を見つめ直していることが作品から伝わってくる。

〈図画の部〉
・コロナ禍の不安な社会の中で、児童生徒の澄んだ心や豊かな感性が健在で、作品に溢れていたことに安心した。
・ご飯が大好きという気持ちが伝わってくる作品ばかりだった。
・おにぎりやご飯がおいしいという気持ちやおなか一杯に食べられるうれしさなどが、画面いっぱいに描かれていた。お母さんや家族のやさしさ、触れ合いなどが感じられた。
・お米や米作りをする人を大切にしたいという思いが作品中に溢れていた。
・ごはんやお米をとらえる視点に中学生らしい広がりがある。画面構成に工夫があり、色遣いが豊かで細部まで丁寧に描いている。

新型コロナウイルスに振り回された一年でしたが、コロナに負けずに生活し、学習した一年でもありました。これからもどんな困難に出会っても、前向きに乗り越えていきましょう。そして、来年もたくさんのお応募を期待しています。

作文部門を審査して



盛岡市教育委員会
学校教育課 指導主事
山下 るり子

本文文コンクールに、今年度も多くの学校、児童生徒の皆さんが応募してくださいました。どの作品も、自分の生活と「ごはん・お米」との関わりについて、五感を通して感じたこと、考えたことをしっかりと綴っていることに嬉しさを感じます。

岩手県知事賞を受賞した佐々木亮輔さん（宮古市立津軽石中学校2年）の「絆の餅つき」は、自身の成長と「継承」という自覚を柱に据えた頼もしい作品です。成長した亮輔さんに信頼を寄せ自覚を促す父親の愛情、孫の成長を心から喜び温かく見守る祖父の優しさ、親子三代の絆と幸福感が餅つきの様子や家族との会話から伝わってきます。

岩手県教育長賞を受賞した菊池咲希さん（一関市立一関小学校5年）の「じいちゃんのお米」は、精選された言葉と畳み掛ける短文によって、臨場感のある作品となっています。信念を語る祖父の言葉を山場とし、「じいちゃん笑顔が重なった」と締めくくるところが実に見事。稲作を誇る祖父が自分の誇りと胸を張る咲希さんの姿が見えるようです。

JA岩手県五連会長賞を受賞した菊池梨花さん（奥州市立木細工小学校1年）の「なんかいもたべたいだけのごはん」は、色・形・音・温度・香りが伝わる五感を使った表現と家族の絆が伝わる会話が効果的な心温まる作品です。文章中には出てこない言葉を使った題名も秀逸です。読後、改めて題名に戻ること深い共感に誘われる魅力があります。

図画部門を審査して



盛岡市立下橋中学校
指導教諭
佐々木 俊江

図画部門を審査してまず感じたことは、子供たちの澄んだ心や豊かな感性が、コロナ禍の不安な社会の中に光を差してくれたということです。どの作品もお米やごはんが大好きという気持ちや家族との触れ合いの大切さが溢れていて、心が温かくなりました。応募してくださいましたみなさんに感謝いたします。素晴らしい作品ばかりで審査は大変難しかったことを申し添えます。

その中でも岩手県知事賞を受賞した藤田若葉さん（北上市立江釣子中学校3年）の「おにぎりの思い出」は、強く心を惹かれる作品でした。おばあさんの優しいまなざしと嬉しそうにおにぎりをつくる作者の表情が温かく、色の重ね方も素晴らしい作品です。また、おにぎりを握る手の描写にも優れていて、画面全体の色合いの柔らかさとともに温かな気持ちが伝わる作品です。

岩手県教育長賞を受賞した高橋一花さん（北上市立南小学校4年）の「おいしいお米で手まきずしパーティー」は、テーブルを囲んだ仲良し家族が笑顔いっぱい、見る人にもうれしさが伝わる作品です。一人一人の表情やテーブルの手まきずしの様子も詳しく描かれていて、画面に引き込まれるような動きを感じる素晴らしい作品です。

JA岩手県五連会長賞を受賞した千葉心遥さん（一関市立滝沢小学校4年）の「ジジとババの田んぼ」は、田植えの様子をよく観察し、たくさんの色を重ねて丁寧に描いている作品です。機械やお

家の光協会北海道東北普及文化局長賞を受賞した藤田若葉さん（北上市立江釣子中学校3年）の「お米が教えてくれた平和」は、視野が広く主張が明確な作品です。老いた祖母の苦労話や世界に貢献した医師の活動を通して、田園風景とお米のあることの「平和」について考えを深めています。

日本農業新聞東北支所長賞を受賞した新田真丸さん（北上市立黒沢尻西小学校5年）の「バトン」は、感受性豊かに表現された田園風景が稲作に対する鋭い問題意識を際立たせる印象的な作品です。祖父の農業継続の意志を尊重し、後継者の自覚が芽生え始めている真丸さんに頼もしさも感じます。

優秀賞を受賞した芦萱陽菜さん（一関市立舞川小学校4年）の「コロナがお米農家に与える影響について」は、優れた洞察力を感じる作品です。コロナ禍による影響から農業や経済の問題へと視野を広げ、稲作と消費の重要性や自分がすべきことについて熟考しています。

同じく優秀賞を受賞した中嶋歩さん（一戸町立奥中山中学校3年）の「伝承と受け継がれゆく味」は、まるで文学のような作品です。卓越した表現力は圧巻。自然の恩恵と農業従事者への感謝の気持ちを「鶏ご飯」で包むことによって、強い主張が嫌みなく伝わってきます。

学校奨励賞は、奥州市立木細工小学校です。全学年における丁寧な指導の継続により、応募作品の全てが、文章構成や表現の優れた作品であることが高く評価されました。

入賞作品は勿論のこと、応募された多くの作品から、日本の主食であるお米への感謝の気持ち、温かな家族への愛情、そして、稲作を大事に継承する郷土への愛着がよく伝わってきました。今後、多くの子どもたちが主体的に「ごはん・お米」に関する様々な体験を行い、表現する機会を大切にしたいことを期待して、講評いたします。

【岩手県コンクール】

◆岩手県知事賞

藤田 若葉 北上市立江釣子中学校 3年 「おにぎりの思い出」

◆岩手県教育長賞

高橋 一花 北上市立南小学校 4年 「おいしいお米で手まきずしパーティー」

◆JA岩手県五連会長賞

千葉 心遙 一関市立滝沢小学校 4年 「ジジとババの田んぼ」

◆一般社団法人家の光協会北海道東北普及文化局長賞

河村 寧音 九戸村立江刺家小学校 1年 「おにぎりおいしいな」

◆株式会社日本農業新聞東北支所長賞

櫻庭 正悠 九戸村立江刺家小学校 2年 「やったぜ、おにぎりだ！」

◆優秀賞

今泉 蒼順 宮古市立宮古小学校 6年 「夕暮れの田んぼを散歩するぼくと弟」

及川 小春 一関市立興田中学校 3年 「思い出とともに〜私達はごはんを食べて成長してきた〜」

◆学校奨励賞

北上市立江釣子小学校

◆佳作

【1部】

井上 天翔 江釣子小 3年 「楽しいもちつき」

鈴木 希彩 江釣子小 2年 「おにぎりおいしい！」

晴山 結月 一関小 1年 「かぞくみんなでおにぎりを」

おにぎりを

片方 星良 黒沢尻北小 3年 「ごはん大すき」

松本 琴葉 江刺家小 2年 「田うえのあとのおにぎり、さいこう！」

おにぎり、さいこう！

廣田 一華 黒沢尻北小 3年 「おにぎりおいしいね」

玉澤璃知佳 藤沢小 1年 「えんそくでおにぎり」

【2部】

伊藤 和奏 江釣子小 4年 「お母さんに教わって米とぎしたよ」

米とぎしたよ

村上 來歩 江釣子小 6年 「みんなで稲刈り」

今泉 柊裕 宮古小 6年 「稲穂に集まるトンボたち

ぼくの指にとまれ」

【3部】

玉澤歩風乃 藤沢小 5年 「植えたての田んぼの鏡」

照井ひなた 湯口小 5年 「楽しい！大へん！米作り」

千葉 優海 真城小 5年 「お米とぼく」

豊巻 慶 黒沢尻西小 5年 「収穫」

坂井 瑞希 下橋中 3年 「おてつだい」

金田 憲明 北上北中 2年 「やっぱりメシは

ご飯に限る！」

工藤 美里 矢巾北中 3年 「笑顔のおにぎり」

下河原陽由 矢巾北中 2年 「一粒一粒に思いをのせて」

高橋 茉緒 北上北中 2年 「大収穫」

田畑 竜一 釜石祥雲支援 3年 「ごはんには、愛がある」

学校中学部

及川奈緒子 北上北中 2年 「家族皆の実りの秋」

【岩手県コンクール】

◆岩手県知事賞

佐々木 亮輔 宮古市立津軽石中学校 2年 「絆の餅つき」

◆岩手県教育長賞

菊池 咲希 一関市立一関小学校 5年 「じいちゃんのお米」

◆JA岩手県五連会長賞

菊池 梨花 奥州市立木細工小学校 1年 「なんかいもたべたいたけのごはん」

◆一般社団法人家の光協会北海道東北普及文化局長賞

藤田 若葉 北上市立江釣子中学校 3年 「お米が教えてくれた平和」

◆株式会社日本農業新聞東北支所長賞

新田 真丸 北上市立黒沢尻西小学校 5年 「バトン」

◆優秀賞

芦 萱 陽 菜 一関市立舞川小学校 4年 「コロナがお米農家に与える影響について」

中 寫 歩 一戸町立奥中山中学校 3年 「伝承と受け継がれゆく味」

◆学校奨励賞

奥州市立木細工小学校

◆佳作

【1部】

高橋 菜緒 江釣子小 3年 「大すきなお米」

平沢 慶佳 一関小 2年 「ごはんの味」

小船 颯 仁左平小 1年 「ぼくのおてつだい」

鎌倉 愛乃 普代小 3年 「ごはんのへん身」

菊池 咲心 木細工小 1年 「ちゃあはんづくり」

菊池 結心 木細工小 2年 「おいしいお米が
とれるといいな」

菊池由佳莉 木細工小 3年 「もちつき」

小原 蒼翼 江釣子小 3年 「ぼくのおにぎり」

【2部】

畠山 茉白 普代小 5年 「思い出のひとめぼれ」

高橋 響望 江釣子小 4年 「大好きなお米」

佐々木みちる 江釣子小 4年 「大へんな米づくり」

【3部】

菊池 美桜 木細工小 6年 「おにぎりパワー」

菊池 優花 木細工小 6年 「飯ごうすい飯」

菊池 苺 木細工小 6年 「キムチチャーハン」

盛合 華代 津軽石中 2年 「私の米ライフ提言」

堀内 茉桜 津軽石中 2年 「私の大好きなお米」

小林 祐駕 和賀東中 1年 「おじいちゃんへ感謝」

平沢 水妃 一関二高附属中 1年 「思いが詰まったお弁当」

二階堂心春 花泉中 1年 「父と祖母の米の味」

今野 紀良 花泉中 1年 「おいしいご飯を
食べ続けたい」

長澤 心優 津軽石中 3年 「食のありがたみ」

第45回「ごはん・お米とわたし」 作文・図画岩手県コンクールの概要

応募点数

学校	作文	図画	合計
小学校	35	144	179
中学校	36	22	58
計	71	166	237

応募締切日

令和2年9月25日

審査会

令和2年10月29日

主催

J A新しいわて・J Aいわて中央・J Aいわて花巻・J A岩手ふるさと
J A江刺・J Aおおふなと・J Aいわて平泉・J A岩手県中央会

後援

岩手県(農林水産部県産米戦略室)
岩手県教育委員会・いわて純情米需要拡大推進協議会
一般社団法人家の光協会北海道東北普及文化局・株式会社日本農業新聞東北支所
J A岩手県信連・J A岩手県厚生連・J A全農いわて・J A共済連岩手

審査員(敬称略)

審査委員長	八重樫 勝	元岩手県教育委員会教育委員長
専門審査委員	佐々木 俊江	盛岡市立下橋中学校指導教諭
専門審査委員	山下 るり子	盛岡市教育委員会学校教育課指導主事
審査委員	佐藤 実	岩手県農林水産部県産米戦略室県産米戦略監
審査委員	北川 司	(一社)家の光協会北海道東北普及文化局長
審査委員	小島 慶太	(株)日本農業新聞東北支所次長
審査委員	荒木田 裕樹	J A岩手県信連代表理事専務
審査委員	藤尾 芳彦	J A岩手県厚生連常務理事
審査委員	松田 功	J A全農いわて米穀部長
審査委員	菊池 秀峰	J A共済連岩手県副本部長
審査委員	後藤 元夫	J A岩手県中央会副会長理事

※このコンクールに対するご意見・ご感想をお待ちしております。

J A岩手県中央会 JA支援部[組織広報班] 〒020-0022 盛岡市大通一丁目2番1号 TEL019-626-8519
ホームページ <https://ja-iwate.or.jp/> Eメールアドレス kouhou@jaiwate.or.jp